



『どんな仕事がある？』

2学期に入り、子どもたちは身の周りの「仕事」に関心を持ちはじめました。「お仕事ってどんなのがある？」と尋ねると「自衛隊」や「消防士」など、よく知る仕事があり、回を重ねるごとに「パティシエ」や「特殊部隊」など、自分で調べたことを進んで紹介する姿も見られるようになりました。

夏休みにキッザニアへ行った子が数名いたこともあり、その子たちに「キッザニアはどんなところか？」「どんなお仕事を体験したのか？」などを話してもらくと、「行ってみたい」「やってみよう」という声次々に挙がり、つばめ組で“キッザニアごっこ”を開くことになりました。



『イメージを可視化する』

それぞれが興味のある仕事を選び、6つのグループに分かれて活動を進めました。各グループでは、その仕事はどんなことをするのか、どんな服装や道具を使うのかを図鑑や本で調べたり、身近な大人に聞いたりしながら理解を深めました。

調べたことを紙にまとめて共有し合う中で、友達の考えや新しい発見に触れ、自分の世界も広がっていきます。さらに「これがあったらお店らしくなるね」「看板を作ろう」「制服も必要だよ」と、イメージを膨らませながら必要なものを話し合ってから製作を始めました。

お店や服装を製作する中では、「ダンボールを貼り合わせる時はセロテープではなくガムテープがいい」「緑と黄緑を混ぜると迷彩柄っぽくなる」など、素材の組み合わせや色使いなどが多彩で、今までの製作活動の経験が活かされる場面が多く見られました。



『「働く」ことの憧れ』

身の周りの仕事に関心を持ち、調べたり友達と話し合ったりする中で、自分の考えを伝えたり他者の意見を受け入れたりする姿が見られました。

キッザニアごっこでは、役割を決めて協力しながら準備を進め、目的に向かって粘り強く取り組む力が育っています。調べたことをもとに自分たちで表現する楽しさを感じ、主体的に学びを深める姿勢や、働くことへの興味・憧れがより一層高まっています。



作りたいものを共有した後、子どもたちはさまざまな素材を使って意欲的に製作を始めました。これまでの動物園や水族館作りの経験から、「どうしたら本物みたいにできるか」「もっとリアルにしたい」と工夫を重ねながら取り組む姿が見られました。活動が始まって間もなく、パティシエチームの子が生活素材などを使って作ったケーキを家から持ってきてくれ、それをきっかけに仲間と「ウエディングケーキにしよう」と話が広がり、協力して大きな作品を作りました。また、警察チームでは帽子や手錠を自分たちで作ったり、陸上自衛隊チームは銃を作る中でスコープを作って狙いを定められるようにしたり、ペットショップチームでは動物を増やすなど、意欲的に取り組む姿がありました。自分の思いやイメージを形にする楽しさを感じながら、仲間と協力し合って表現する力や、考えたことを工夫して実現しようとする主体的な姿勢が育っています。



宇宙服作りでは、図鑑を見ながら本物の宇宙服の細かな部分に注目し、宇宙ステーションのワッペンや無線機を画用紙で再現しようと工夫する姿が見られました。「ここにボタンがあるね」「線をつなげてみよう」など友達と意見を出し合いながら製作を進め、完成に向けて試行錯誤する姿がありました。



アイドルチームでは、「この組み合わせかわいいね」と話しながら、ビーズの色や形の組み合わせにこだわってプレスレットやネックレス作りを楽しんでいました。完成しても「もう少しピンクを入れたい」と再び作り直すなど、自分の思いを大切にしながら試行錯誤する姿が見られました。



ペットショップチームでは、動物を作るだけでなく「どんな家に住んでいるのかな」と考えながら動物の住まい作りにも取り組んでいました。お風呂を付けたり、持ち運べるようにバッグ型にしたりと、一人ひとりが自分なりの工夫を凝らして表現していました。



『違いから広がる学び』

キッザニアの製作を進める中で、子どもたちから「〇〇くんが違うのを作っているよ」という声が聞こえる場面が増えてきました。活動の初期は、本物らしさを追求し、図鑑や写真を見ながら忠実に再現しようとする姿が多く見られていました。製作品が形になるにつれて「こんな風にした」「こうしたらもっといいかも」と、数名の子どもたちが自分なりの「良さ」や「かっこよさ」を取り入れ、オリジナルのアイデアを加えて作る姿が見られるようになりました。

子どもたちは皆「本物みたいにしたい！」という思いで作っていると思込んでいたのですが、必ずしも全員がそういった思いではなかったことに気付かされました。



そこで、どうしてその形や色にしたのかを一人ひとりに丁寧に尋ねてみると、「こっちの方がかっこいいと思ったから」「僕はこの方が好きだから」と、それぞれが自分の考えや感じたことをしっかりと伝えてくれました。その言葉を聞いた周りの子どもたちも、「確かにそっちの方が素敵かもしれない」「自分もこの部分を変えてみようかな」と、友達の意見を受け入れたり、自分の製作に活かしたりする姿が見られるようになりました。

当初はグループに分かれて、グループのみんなが図鑑や写真などのイメージに向かって、製作に取り組んでいました。製作過程において「本物らしくしたい」思い、「自分が好きなようにアレンジしたい」思いに目標が分かれたようですが、そういった「違い」を認め合える姿から子どもたち同士の関係性や寛容性の深まりを感じます。

また、自分と違う表現をする友達を否定するのではなく、「どうしてそうしたの？」と相手の思いを聞こうとする姿勢が広がったことで、互いの価値観を尊重する雰囲気がクラス全体に生まれていきました。

子どもたちの中に、ただ本物らしさを追い求めるだけでなく、自分の好きやこだわりを大切に作る姿が見られ、それを認め合う関係が育ってきたことは大きな成長だと感じます。

「みんなで同じように作らなくてはいけない」のではなく、「自分らしい表現でもいい」「みんなと一緒にだめではなく、一緒にいい」この製作活動を通してそんな気持ちを味わったことが、友達の考えを受け入れようとする姿、多様な考え方を尊重する心にも繋がっていくのだと感じています。



『みんなで創るキッザニア』

子どもたちと製作活動が進む中で、「キッザニアが完成したらどうする？」という話し合いを行うと、自分たちの作ったキッザニアをほかの人にも体験してもらいたいという思いから「お客さんと呼んでみたい」という意見が出ました。そこで、年長のもう一つのクラスを招待することになり、その前段階として、まずはつばめ組だけでプレオープンを行うことにしました。

実際に店員役とお客さん役に分かれて体験してみると、「的当ての的が見にくい」「ペットショップの動物には名前があった方がわかりやすい」など、お客さんがよりよい体験ができるようにするための意見が多く生まれました。子どもたちは振り返り後にすぐに製作に取り組み、必要な物を追加で作ったり、見やすいように配置を工夫したりと、自ら改善しようとする姿が見られました。



その後、年長の2クラスを別々の日に招待し、お客さんとして体験してもらいました。活動後の振り返りでは、「お客さんに見られると恥ずかしかった」「体験の説明が難しかった」など、これまで感じていなかった新しい気づきを得たようです。クラスの友達同士では、お互いに内容を知っているため説明が少なくても理解し合えていましたが、初めて体験する相手に対しては、自分の言葉で分かりやすく説明する力が必要であることに気付いた様子でした。

その気づきから、「どうすれば相手に伝わるのか」という話し合いが始まり、「もっとたくさんお客さんに来てもらって、見られることに慣れたい」「まずは自分が何を作ったのかを伝え、そのあとにどんな体験ができるかを説明する」など、子どもたち自身で改善策を考えていきました。これらの話し合いを通して、相手の立場を想像しながら言葉を選ぶ姿や、より良くしたいという意欲をもって活動に向き合う姿が見られました。自らの経験をもとに課題を見つけ、友達と意見を出し合いながら改善しようとする過程は、子どもたちにとっての主体性や協同性の育ちに繋がる大事な時間だったと感じています。